

「子どもたちの『今』から、子どもの人権を考える」

公益社団法人 子ども情報研究センター理事 奥村仁美

チャイルドライン（18歳未満の子ども専用電話）や子ども家庭相談室（主に子どもの人権侵害に関する相談）の活動で、15年以上前から子どもの声を聴いてきました。『今』と15年前とで、子どもたちはどう変わったのでしょうか。

15年前のわたしは、自分の子どもが小学生で、子育てしながら、子育てサークルの活動や、地域の子ども会や子育てサロンなどの子育て支援の活動にかかわっていました。子どものいるところにいたいと思い活動してきたことなのですが、どう活動を進めればいいのか、迷いもありました。自分自身の子育てで悩むこともありました。おとなは子どもとどう対峙すればいいのか。おとなとして、子どもになにか教えなくては、伝えなくてはと思っていたわたしは、子ども専用電話で子どもはなにを語るのか、その声を聴いてみたいと思いました。

子どもはたくさんのことを教えてくれました。学校の休み時間が短いこと、枕はおひさまのにおいがすること、いつもなにかわからないけれど怖いと思っていること、おとなは子どもに謝らないこと、おとなは「みんな」とよくいうけれども「みんな」ってだれ？と子どもは思っていること、比べられたらいやということ、おとなはいそがしいと思っていること、子どもは人を許す力を持っていること、時々どうにもならない悔しいことにぶちあたること… 子どもの感性のゆたかさやおとなの身勝手さに気づかされることばかりでした。

同時に気づいたのが、子どもには力があるということです。子どもまわりで起こったできごとをどうしていくのがいいのか、ちゃんと子どもは表現していると感じました。例えば、電話のむこうで友だちと気まづくなったことを話してくれているとき、聴かせてもらううちに、今はがまんしよう、チャンスがあればこうしてみようというようなことが子どもから出てきたりします。それは、おとなのアドバイスとは比べものにならないくらいその状況をよく把握しているものでした。子どもの力を感じながら子どもの意見表明を受けとめることにより、子どもとともによりよい環境をつくっていけると確信できるものでした。子どもに教えたり、伝えたりするよりも、わたしが子どもから学ばなければ。

現実には、子どもの声はまだまだ小さくて、その力に気づいていないおとなに囲まれている環境にいる子どもがたくさんいると思います。「子どもの権利条約」が日本で批准されて25年になりますが、子ども家庭相談室では人権侵害で苦しんでいる子どもに出会います。親子関係、いじめ、おとなからの暴力など、子どもはつらい気持ちを表しても、その気持ち理解されまわりが変わっていくことはほとんどなく、「あなたの問題。あなたが変わらない」と言われることもあります。

15年経っても、子どもの声は小さいままのように感じます。ゆえに苦しみ続ける子ども

がいることも事実だと思います。おとなは、子どもの声に耳を傾け、その声で物事を動かしていく勇気を持たなければ、なにも変わらないのかもしれませんが。いきなりは難しくても、子どもの声に耳を傾けて、一緒に考えるところから歩んでいけたらと思います。子どもは、いつの時代も、力を持っています。